

ロロ＝ビルマ祖語*? が現代チノ語に与えた影響について

林 範彦

0 はじめに

0.1 チノ語について

チノ語は中国雲南省西双版納^{シーサンパンナタイ}族自治州景洪市^{ジンホン}基諾郷^{チノ}および補遠^{ブーユン}山地区に居住するチノ族の話す言語である。チノ族の人口は約 2 万人存在する。方言に大きく悠楽^{ヨウラク}方言と補遠方言の 2 種類存在する。本論文では筆者の採集した悠楽方言のデータを扱う^{注1}。

チノ語は系統的にはチベット＝ビルマ語派ロロ＝ビルマ語支に属する、と考えられる。一般的にチノ語はロロ系であると考えられているが、頭子音体系などの一部でビルマ系的要素も多分に含んでいるため^{注2}、慎重な検討を要する。

^{注1} 本論文で扱うチノ語のデータは筆者が 2000 年 7-8 月、2001 年 1-3 月、7-8 月、2002 年 7-8 月に中国雲南省西双版納傣州景洪市基諾郷において調査したものである。筆者の執拗な調査に辛抱強く答えて頂いたチノ族である王阿珍さん(1980 年生まれ)にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。また本調査は文部科学省特定領域研究(A)「環太平洋のく消滅に瀕した言語」にかんする緊急調査研究(領域代表者 宮岡伯人)の援助を受けている。この場を借りて感謝申し上げます。

なお、チノ語に関する先行研究には蓋(1981)および蓋(1986)が存在する。記述の正確さの面から、LB 諸語における比較研究には蓋(1986)が多く用いられてきた。蓋(1986)も緊喉母音を音素として立てていない。

筆者のデータから得たチノ語の音素目録を以下に掲げる。

[チノ語の音素目録]

チノ語の音素目録は、[子音]/p, ph, t, th, k, kh; ts, tsh, tʃ, tʃh, tɕ, tɕh; m, m̥, n, ŋ, ɲ, ɲ̥, ŋ̥; l, l̥; f, v, s, z, ʃ, r, ɕ, j, x, ɣ, (w)/, [母音]/i, e, ø, ε, œ, a, ə, ɔ, ɤ, o, u, u/である。声調素は/55, 44, 33, 35, 42/である。チノ語のみならず、ここに挙げているすべての言語の音節構造は頭子音 + 介音 + 主母音 + 末子音/声調で構成される。本論文では頭子音 + 介音を「声母」と呼び、主母音 + 末子音を「韻母」と呼ぶことにする。ロロ系では末子音がないことが特徴的である。チノ語も LB 同源語では末子音がないが、漢語・傣語からの借用語では鼻音が末尾にくることもある。

^{注2} ロロ系諸語の頭子音は一般的に有声無気音 vs. 無声無気音 vs. 無声有気音が対立しているが、ビルマ系諸語では有声無気音が存在しない。チノ語はビルマ系と同じく有

ロロ = ビルマ系諸語 (以下 LB 諸語) の多くは緊喉母音を音韻体系にもっている^{注3}が、チノ語には存在しない。一方で、LB 諸語のほとんどで初頭子音の体系に、無声鼻音・側面音をもっていないが、チノ語には存在する。

本論文では LB 諸語の緊喉母音を持つ語彙とチノ語の無声鼻音・側面音を持つ語彙が対応することを見、それらの起源の一つとして*ʔ-を推定する。またこの*ʔ-が現代チノ語の音韻体系に与えた他の影響についても考察を行う。

0.2 本論文で用いる祖形再構の方法について

本論文の各所でロロ = ビルマ祖形 (以下 PLB 形) を再構しているが、一般的にとられている比較言語学の手法と多少異なる。

声母・韻母のいずれも LB 諸語全体を見通しておかなければならないが、声母・韻母で再構に際する参考言語が異なる。

まず、声母に関してはロロ系を参考にする、その理由は、破裂音・破擦音声母で有声音・無声音の対立を残している言語群だからである。ビルマ系はその対立を失い、無声音の無気音・有気音の対立に変化したと考えられる。ロロ語あるいはハニ語で有声音があるセットでは、祖形にも有声音を立てるのが妥当である。

韻母に関してはビルマ系を参考にする。その理由は、韻母に末子音を残存している言語群だからである。ロロ系はその末子音を摩滅させたと考えられる。韻母の再構においてビルマ文語 (あるいは古代ビルマ語) を最も有力なデータと見る。

このようにして再構した PLB 形における声母は未だ問題を有する。例えば[?]をともなった*[?]p-などを単一の声母として取り扱うか、*[?]p-のような形の子音連続として扱うかなどである。-で区切ってしまうと、*[?]-が何らかの形態素であることを認めてしまう可能性があり、その点は検討の余地がある。

声無気音が存在しない。1 を参照されたい。

^{注3} 比較に用いたチノ語以外のデータは、ビス語を Bradley (1988)、サンコン語を李 (1992) から採録しているほかは、ほぼすべて黄主編 (1992) を参考にしている。特に示さないかぎり、ハニ語は緑春方言の、ロロ語は喜徳方言のデータである。ただしアチャン語のデータにおいて <戴> と示しているものは戴 (1985) によっている。ビルマ語の表記で一部藪 (1982) を参考にしている。ビス語に関しては最近の資料として Kato (2002) が発表された。これはタイのドイ・チョンプ村 (旧ホアイ・チョンプ村) のビス語の基礎語彙を集めたものであるが、Bradley (1988) の資料と大きく食い違う点はないため、ここでは Bradley (1988) の資料によることにする。ビス語の例の最後に数字を挙げているが、これは Bradley (1988) のデータにおける番号である。

0.3 本論文の構成について

まず 1 でチノ語の音素目録が LB 諸語においていかなる位置にあるかを典型的に見る。次に 2 でチノ語の無声鼻音/側面音がアチャン語やビス語のそれと対応していることを見て、PLB において*ʔ-が前接子音として存在したのではないかと、いうことを考える。更に 3 では LB 諸語の緊喉母音がチノ語といかに対応するかを見、緊喉母音の発生の起源も*ʔ が関係していることを述べる。4 でまとめを行う。

1 チノ語の音素目録の LB 諸語における典型的な位置づけ

チノ語の声母は、ロロ系諸語^{注4}に比して以下の点で特徴的である^{注5}。

- (1) a. 閉鎖音と破擦音の系列では無声音しか存在せず、有気音と無気音の 2 対立である。
- b. 鼻音と側面音の系列で無声音と有声音の対立がある。

一方、黄主編 (1992) に掲載されている中国領内の LB 諸語の音素目録を通覧すると、声母に無声鼻音・側面音が存在する言語は極めて少ない。

ロロ系諸語の一般的な特徴としては、閉鎖音・破擦音の系列では無声無気音・無声有気音・有声無気音の 3 対立が存在しており、一方で鼻音・側面音は有声音しか存在しないことがあげられる。上の (1) のような特徴を持つ言語は、ロロ系諸語を俯瞰すると、(1a) をハニ語墨江方言 (戴・段 1995: 193) が、また (1b) をロロ語喜徳方言 (陳・巫 1998: 5) が持つほかはほぼなく^{注6}、また (1a,b) の両方ともの特徴をあわせ持つ言語はチノ語以外にはほぼない^{注7}。

まず、声母の鼻音・側面音について有声/無声の対立の有無を見ると、LB 諸語では以下のようになっている。

^{注4} 一般に LB 諸語はロロ系諸語 (H, L, Lis など) とビルマ系諸語 (Ac, M, Las, At, C, WB など) に分けられている。本論文ではロロ系は *slant* 体で、ビルマ系は *sans serif* 体で書かれている。

^{注5} チノ語はこれまでロロ系であるとされているため、一旦ここではロロ系諸語と比べた。(1a) はビルマ系と共通する特徴である。

^{注6} 最近提出された資料をみると、ハニ語咪疊方言 (白 1990) やロロ語葛頗方言 (王 2001)、濮拉頗方言 (龍・李 2001) にも ʔ と l の対立があるようだ。しかしそれぞれ無声鼻音を音素に持たない。

^{注7} より正確にはハニ語墨江方言の側面音には有声/無声の対立がある。しかし鼻音は有声しかない。ハニ語墨江方言はチノ語にかなり近い言語と考えられる。

(2)

	J.	H.	L.	Lis.	Ac.	M.	Las.	At.	WB.	Bs.	Sk.
a. N- : Ṇ-	+	-	+	-	+	-	-	-	+	+	-
b. L- : Ḷ-	+	-	+	-	+	-	-	-	+	+	-

(2a) は鼻音の有声/無声の対立、(2b) は側面音の有声/無声の対立の有無を示している^{注8}。(2a, b) の両方ともの特徴を持つ言語はチノ語・ロ口語(喜徳方言)・アチャン語・ビルマ文語・ビス語である。

韻母の類型は以下のとおりである。

(3)

	J.	H.	L.	Lis.	Ac.	M.	Las.	At.	WB.	Bs.	Sk.
a. -V: -VC	-	-	-	-	+	+	+	+	+	+	+
b. -V: -Ṿ	-	+	+	+	-	+	+	+	-	-	+
c. -V: -VV	+	-	-	+	+	+	+	+	-	-	+

(3a) は韻母において開音節と閉音節(閉鎖音末子音をもつ)の対立が存在するか否か、(3b) は非緊喉母音と緊喉母音の対立が存在するか否か、(3c) は二重母音が存在するか否かを示している^{注9}。

これらから分かることは、特にマル系諸語(Maruic^{注10})の韻母は比較的一貫して同様の状況が見られるものの、チノ語と同じ状況の韻母体系をもつ言語は見られない。緊喉母音がないという観点を重視してみると、アチャン語やビス語と状況が似ていると考えられる^{注11}。先ほどの声母の状況とあわせて考えると、チノ語・アチャン語・ビス語の3言語が「声母に無声鼻音/側面音を持ち、韻母に緊喉母音を

^{注8} それぞれにおいて-が付いている言語は有声音しか存在しないものを表す。

^{注9} -が付いている言語は、(3a)においては音韻体系内に開音節のみがあるもの、(3b)においては音韻体系内に非緊喉母音のみがあるもの、(3c)においては音韻体系内に単母音のみがあるものを指す。

^{注10} 通常、マル語・ラシ語・アツィ語のことを言う。

^{注11} LB 諸語の中で緊喉母音の存在を巡り、長い間論争を続けてきた言語にナシ語がある。この論争については黒澤(2001)が詳しい。黒澤は胡・戴(1964)の「ナシ語に緊喉母音はない」という記述から端を発する一連の論争をまとめつつ、自身の調査の経験も合わせて考察し、結論としては存在否定派の意見に同調している。存在肯定派には楊(1984)がある。しかし楊(1984)は音韻的に整理できていない点も多い。例えば [i], [ɨ], [ɨ] をそれぞれ音素に立てているが、データを見る限りそれぞれは相補分布をなしており、音韻的には/i/にまとめられると考えられる。緊喉母音も音韻的に整理が可能かもしれない。

もたない」という共通した特徴を、音韻体系内に兼ね備えていることが読みとれる注¹²。これまでチノ語・アチャン語・ビス語の3言語は系統上異なる下位語群に分類されてきたが、音韻構造から見ると、それぞれは極めて近似した特徴をもっていると言える。

2 無声鼻音/側面音の対応

ここではチノ語で無声鼻音/側面音を持つ語と LB 諸語の同源語との対応を通じて、その来源を探ってみたい。

まず、以下の例を見てみよう。

- (4) a. nə⁴²(「君、あなた(主格)」; *H. no*⁵⁵; *L. nu*³³; *Lis. nu*³³; *Ac. nuəŋ*⁵⁵; *M. n̄*³¹; *Las. naŋ*³¹; *At. naŋ*⁵¹; *C. nɔŋ*⁵⁵; *WB. nang*²; *Sk. naŋ*⁵⁵; *ZM931*)
 b. ŋɔ⁵⁵(「5」; *H. ŋa*³¹; *L. ŋu*³³; *Lis. ŋua*³¹; *Ac. ŋɔ*³¹; *M. ŋɔ*⁵⁵; *Las. ŋ*³³; *At. ŋo*²¹; *C. ŋɔ*³¹; *WB. nga*²; *Sk. ŋa*³¹; *ZM801*)
 c. ŋɔ⁴²(「私(主格)」; *H. ŋa*⁵⁵; *L. ŋa*³³; *Lis. ŋua*³³; *Ac. ŋɔ*⁵⁵; *M. ŋɔ*³¹; *Las. ŋo*³¹; *At. ŋo*⁵¹; *C. ŋɔ*⁵⁵; *WB. ngaa*¹; *Sk. ŋa*⁵⁵; *ZM928*)
 d. ŋɔ⁴²(「聞く」; *H. na*⁵⁵*xa*³¹; *L. ŋa*³³; *Lis. nɔ*³³*lo*³⁵; *Ac. ŋam*³¹ <戴>; †*M. kjo*³⁵; †*Las. kjo*³³; †*At. kjo*²¹; †*C. kzo*³¹; *WB. na*²*thɔŋ*¹-; *Sk. na*⁵⁵; *ZM1681*)
 e. m̄jo³³(「高い」; †*H. go*³¹; *L. a*³³*mu*³³; *Lis. mo*³³; *Ac. m̄zaŋ*⁵⁵; *M. mjɔ*³¹; *Las. mja*:ŋ³³; *At. mjaŋ*⁵¹; *C. m̄zaŋ*⁵⁵; *WB. mrang*³-; *Sk. moŋ*³³; *ZM968*)

更に側面音を見ると以下のような対応が見られる。

- (5) a. le⁵⁵(「行く」; †*H. ji*⁵⁵; *L. (武) li*¹¹; †*Lis. gi*³³; *Ac. lɔ*⁵⁵; *M. jɛ*³⁵/*lɔ*⁵⁵; *Las. lɔ*⁵⁵; *At. e*⁵¹*lo*⁵⁵; *C. lɔ*³⁵; †*WB. swa*²-; *Sk. e*⁵⁵/*le*³³; *ZM1579*)
 b. lɔ⁴²(「来る」; *H. la*⁵⁵; *L. la*³³; *Lis. la*³³; †*Ac. zə*³⁵; *M. li*⁵⁵/*lɔ*³¹; *Las. le*⁵⁵; *At. le*⁵⁵; *C. lɔ*⁵⁵; *WB. laa*¹-; *Sk. zɪ*⁵⁵/*la*⁵⁵; *ZM1491*)
 c. a⁵⁵lɔ⁴⁴(「～月」; *H. (墨) lɔ*³³; *L. tɔ*²¹; *Ac. pau*⁵¹lɔ³⁵; *M. lɔ*⁵⁵; *Las. lɔ*⁵⁵*mo*⁵⁵; *At. lɔ*⁵⁵*mo*⁵⁵; *C. lɔn*³¹; *WB. la*³; *Sk. pe*³¹*la*³³; *ZM771*)

注¹² 蓋 (2002) は中国雲南省麗江地区で話されているトロ語 (堂郎語) を初めて紹介している。話者人口は約 2000 人とのことである。この言語は蓋 (2002) の資料を通覧すると、LB 諸語に近いと考えられるが、とくに音節構造がほぼ開音節であり、口系性格が強い。しかし、緊喉母音は持たないようだ。声母においては若干の語彙に無声口蓋垂鼻音 (ŋ) を持つが、その他の調音点の無声鼻音はみられないらしい。

- d. a³³lo⁵⁵(「暖かい」); H. (墨) lu⁵⁵tshɛ³³ti³³; L. tsha³⁴to³³; Ac. lum⁵⁵; †M. njɔ³⁵; †Las. ny:³³; †At. nje²¹; †WB. nwei²thwei²-; Sk. hem⁵⁵; ZM1065)
 e. ɬø⁴²(「脱ぐ」); H. (墨) ɬi³³; L. ɬ⁵⁵; †Ac. kzək⁵⁵; †M. khjet⁵⁵; †Las. khju:t⁵⁵; †At. khjut⁵⁵; †C. khuk⁵⁵; †WB. khjot-; Sk. he³³; ZM1695)

以上が基本的な対応例であるが、チノ語の鼻音/側面音はアチャン語・ロロ語(またはハニ語墨江方言)とそれぞれ無声音同士、有声音同士でおおむね対応している。

しかし一方で、無声と有聲の対応が入り乱れていることも多い。以下の例を見よう。無声鼻音/側面音を音素体系にもつ言語を取り上げる^{注13}。

- (6) a. ni⁵⁵pu⁴⁴(「鼻水」); L. na²¹bi⁵⁵; Ac. nap⁵⁵; SB. nã²²; Bs. hnàw(152); ZM157)
 b. nu³³su⁵⁵(「心臓」); L. (南) ni³³mo³³; Ac. na⁵⁵lum³¹; SB. nã²²; Bs. nuɾba(sù) (142); ZM144)
 c. no³³to⁵⁵(「鼻」); L. na²¹bi⁵⁵; Ac. noŋ⁵⁵; SB. na²²khaũ⁴⁴²; Bs. nákhán(93); ZM80)

上の例からすると、他言語で無声でもチノ語・ビス語で有聲の例が存在することが分かる。この例ではチノ語とビス語が有聲化の現象を共有しているように見える。また一方で、チノ語の無声鼻音がほぼビス語のみと対応していることもある^{注14注15}。

- (7) a. me⁵⁵(「疲れている」); †L. dzi⁵⁴to³³; Ac. muai³¹; SB. nãũ⁴⁴²; Bs. hmɿ(523); ZM1495)
 b. a³³me⁵⁵(「名前」); L. mi³³; Ac. a³¹niŋ⁵⁵; SB. na²²mi²²; Bs. ?aŋhmèŋ(419); ZM687)
 c. la³³mo⁵⁵(「右」); †L. la³⁴zi³³; †Ac. lo³¹zo⁵⁵pa³¹; †SB. ja²²/naa²²; Bs. làhma(445); ZM711)

^{注13} 現代語のなかでビス語の無声鼻音だけ hN- の表記をしている。これは Bradley (1988) の表記をそのまま採用しただけのことで、無声鼻音であると考えて差し支えない。

^{注14} ビス語はタイ語からの借用語でも無声化を起こしているものがあるようだ。

Bs. ?aŋhŋaj 「容易だ」: Th. nãai (坂本 1996: 15, 158)

^{注15} 他の言語で有聲である語がビス語で無声になる例は硬口蓋接近音でも見られる (a, b)。またその逆の例も存在する (c)。

a. 「象」 Bs. hɟaba; J. jo⁴⁴

b. 「鶏」 Bs. hja; J. ja⁴²

c. 「軽い」 Bs. ?aŋjáj; J. a³³zo⁵⁵

- d. to⁵⁵mi⁵⁵(「尻尾」; L. (巍) [?]me²¹phE²¹; †Ac. tchi³¹paŋ³⁵; SB. a⁴¹mji⁴⁴²; Bs. tɔŋhni(84); ZM267)
- e. a⁵⁵mu⁵⁵(「毛」; †L. ɲe³³; Ac. a³¹mui³¹; SB. a⁴¹mwe⁴⁴²; Bs. [?]aŋhmu(90); ZM266)

これらの無声鼻音m-の扱いをどうするかは難しいが、ビス語とチノ語の無声鼻音の対応があることを考慮すると、祖形にはなんらかの前接子音らしきものが存在したと考える必要がある。Bradley (1979: 144) は PLB においてこれらの語では m-の前に*ʔ-が存在していたと述べており、その際の現代語への反映は、ビルマ口語においては m-であるが、ビス語の hm-, 口語のm-と対応している、と考えている。ここでも Bradley (1979) 同様、これらの鼻音の前に*ʔ-があったことを提案しておきたい。ビス語とチノ語が PLB. *ʔ-N において並行的に無声鼻音となっていることは注目に値する^{注16}。

また、(7d) のように、口語巍山方言においても興味深い対応が見られることに注意したい。巍山方言では初頭にʔ-を伴っていることが多いため、祖形に*ʔ-を立てる一つの根拠となろう^{注17}。

3 緊喉母音との対応

2 ではチノ語の無声鼻音/側面音から PLB. *ʔ-を推定した。本節では他の LB 諸語に見られる緊喉母音の対応からも同様に PLB. *ʔ-を推定できることをみる。

チノ語は (3) などで見たように緊喉母音を音韻体系に持っていない。一方でその他の LB 諸語の多くは緊喉母音を持っている。

本節では LB 諸語の緊喉母音とチノ語の対応を見、緊喉母音の発生について探っていくきたい。

^{注16} Kato (2002) のビス語資料では (7d) の例は tɔŋ²¹ŋi²¹, (7e) の例は ʔaŋ³³mu²¹ となっている。方言差であろうか。

^{注17} 他にも例えば、[?]mi³³tsE²¹「目」、[?]mi⁵⁵「名前」などがある。これらから口語巍山方言は緊喉母音化への移行の過程を示していると言えるだろう。これについては岩佐 (1996) が口語の方言比較を通して検証している。それによると、巍山方言は他の方言に比べて古い形式を残しており、他の方言の多くが鼻音/側面音において有声に合流してしまった一方で、喜徳方言は無声音に反映していったとしている。筆者も大筋でこの意見に同意したい。ただ、岩佐 (1996) は巍山方言の初頭のʔ-を h-からの変化として考えており、チベット文語との比較から、*s->*h->ʔ-の変遷を巍山方言で推定しているようであるが、筆者はその点についてはいまだ全面的には賛成できない。

3.1 チノ語の無声鼻音/側面音：LBの緊喉母音

チノ語の無声鼻音/側面音とその他のLB諸語における緊喉母音の対応を見ていこう。

- (8) a. a³³na⁵⁵(「深い」; *H.* na³¹; *L.* (武) na⁵⁵; *Lis.* ne⁵⁵; †*Ac.* lak⁵⁵; *M.* no⁷³¹; *Las.* nə:k³¹; *At.* nik²¹; *C.* nuw⁵⁵; *WB.* nak-; *Bs.* ʔaŋhnà(545); *Sk.* na³¹; ZM982)
- b. ni⁵⁵(「～日」; *H.* no³³; *L.* (巍) ʔn³³; *Lis.* ni³³; *Ac.* ɲen³¹; *M.* ne⁷³¹; *Las.* ɲjei⁵⁵; *At.* ɲji⁵⁵; *C.* nen³⁵; *WB.* nei³; *Bs.* hnùŋ/nuŋ(461); *Sk.* nuŋ³³; ZM910)
- c. la³³nu⁵⁵(「指」; *H.* la³¹no⁵⁵; *L.* (南) le²¹ni³³; *Lis.* le³¹ni³³; *Ac.* lo⁷⁵⁵ɲau³¹; *M.* lo⁷³¹ɲju⁵⁵; *Las.* lo⁷³¹ɲjo⁵⁵; *At.* lo⁷²¹ɲju²¹; *C.* lo⁷⁵⁵ɲau³¹; †*WB.* lak-khjoŋ²; *Bs.* làhjuŋ(113); *Sk.* la³¹nuŋ⁵⁵; ZM109)
- d. lo⁴²(「脱ぐ」; *H.* le³³; *L.* (南) li²¹; †*Lis.* zi⁵⁵; †*Ac.* kɛk⁵⁵; †*M.* khjet⁵⁵; †*Las.* khju:t⁵⁵; †*At.* khjut⁵⁵; †*C.* khuk⁵⁵; †*WB.* khjot-; *Bs.* —; *Sk.* he³³; ZM1695)
- e. pu⁵⁵lo⁴⁴(「月」; *H.* (墨) po³³lo³³; *L.* to²¹bo²¹; †*Lis.* hāba³³; *Ac.* phä³¹lo⁷³¹; *M.* lo⁵⁵; *Las.* la⁵⁵mo⁵⁵/lo⁵³; *At.* lo⁵⁵mo⁵⁵; *C.* pau⁵⁵lo³¹; *WB.* la³; *Bs.* ʔuhla(318); *Sk.* pe³¹la³³; ZM4)
- f. lo⁵⁵(「さらす」; *H.* lo³¹; *L.* h⁵⁵; *Lis.* le⁵⁵; *Ac.* lap⁵⁵; *M.* le⁷⁵⁵; *Las.* la:p⁵⁵; *At.* lap⁵⁵; *C.* lap⁵⁵; *WB.* hlan²-; *Bs.* —; *Sk.* hap³¹; ZM1604)

胡・戴(1964)や戴(1985)などでも指摘されてきたように、LB諸語の緊喉母音と声母における無声鼻音/側面音には一定の関係があるとされてきた。ただそれがいかなる過程を経てきたのかについてはこれまでなら考察されたことはなかった。戴(1985)などが緊喉母音の形成過程について「無声鼻音/側面音の有声化の代償」をほのめかしたことはあった^{注18}が、深くその来源を説明していない。

^{注18} 戴(1979)にその最初の論考が示されている。ここでもすでに声母や声調との関係が密接であると述べられているが、残念ながら祖形の再構までは論が進んでいない。なお、他の研究ではあまりみられないが、戴(1979)ではチベット文語も考察の対象に入れている。ただしチベット文語を含んだ先行研究はチベット＝ビルマ祖語まで考えていることとなり、本論文の内容とは直接にはつながらない。本論文はチベット＝ビルマ祖語から派生したロロ＝ビルマ祖語までを対象とするからである。

一方で黄(1994)でも声母の影響による母音の緊喉化を扱っているが、やはり無声鼻音の主な起源をチベット文語にある前置子音*s-に求め、アツィ語の緊喉母音はそ

これまでの先行研究(戴 1990、西田 2000 など)で緊喉母音の発生は主に「末子音脱落の代償」であると捉えられてきた。ただ緊喉母音の発生源はそれだけではないと考えねばならない。たしかに上の例を見てみると、(8a)はビルマ文語で主母音 + 末子音の構造に-ak を持っているために、PLB. *-ak を考え^{注19}、口ロ系では一律開音節化^{注20}が進んだ結果、その代償として緊喉母音になった一方で、チノ語は無声鼻音を持つようになったと捉えることができる。ただし(8b, c, d, e)はいずれもその一元的説明では解釈できない。

(8c)^{注21}はマル語が末子音 -k を有しているの、これを基に考えると、(8a)と同じ説明ができそうだが、この -k はマル語独自の音変化の結果生じたもので^{注22}、別に扱う必要がある。ここは、チノ語 -u : アチャン語 -au : マル語 -uk の対応から、PLB. *-u を考えなければならない。すなわち PLB 形が開音節であるために(8a)と同じ説明ができない。(8d)の場合は口ロ系の語彙のみが対応しているため、そもそも末子音の存在の証明ができない。さらに(8b, e)は例に挙げた言語すべてで叙声韻^{注23}である。これらはどのように考えればよいのか。

の脱落から生じたものであると考えている。黄(1994)はアツイ語の緊喉母音を伴った鼻音が一旦無声化の段階を経たかどうかは証拠がないため言えないとしている。

^{注19} チノ語の主母音-aの起源は基本的に PLB. *-ak であると考えられる。詳しくは林(2002a)を参照されたい。

^{注20} 0.2でも簡潔に述べたが、より具体的に模式化すると以下になる。韻母において、口ロ=ビルマ祖語から口ロ系とビルマ系へ変遷を考えると、祖形で単純母音であったものも子音の韻尾をもつものも、口ロ系は一律に単純母音化が進み、ビルマ系ではそのまま保存している傾向がある。

PLB.	口ロ系	ビルマ系
*CV#	CV#	CV#
*CVC#	CV#	CVC#

ただし、口ロ系とビルマ系を分ける基準を韻母のみに求めることはできない。たとえば、ハニ語の方言やサンコン語など韻母に鼻音韻尾を持つものもあるが、口ロ系に属するとされている。

^{注21} Kato(2002)では(8c)のビス語は la²¹nuŋ²¹となっている。

^{注22} LB 諸語の韻母の比較において、ビルマ系言語に末子音がある場合、基本的に PLB でも末子音を再構築する。しかしマル語において末子音がある場合でも、マル語内の変化で生じたものである可能性もあり、注意が必要である(Burling 1966)。ビルマ系諸語を通覧して、マル語のみ末子音がある場合は、基本的に祖形には末子音がなかったと考えるべきである。

^{注23} 開音節、あるいは閉音節で末子音が鼻音である韻母をいう。叙声韻の対語は促声韻だが、これは末子音が閉鎖音である閉音節の韻母をいう。

一つの考え方は (8b, e) を基に考える方法である。(8b, e) はビルマ文語で第 3 声調、すなわち緊喉調で、そもそも緊喉母音を有している声調であるため、祖形の段階においてすでに緊喉母音をともなった声調であった可能性を考えることができる。ただ 2 でも見たように、チノ語の無声音に対応する祖語の形式は音節初頭に *ʔ- を伴っていた可能性があると考えられることから、(8b, e) におけるビルマ文語の緊喉調の起源も *ʔ- であると見なせるであろう。

ここで先行研究の中でも声母からの影響で緊喉母音を発生させたとみるもの (Thurgood 1981, 黄 1994^{注24}, Nishi 1999) を参照してみなければならない。Thurgood (1981) はビルマ語の緊喉調の起源の一つを出動名詞の接頭辞 ʔa- に求めている。接頭辞 ʔa- が緊喉調を生み出したとする考え方はきわめて重要である。

Nishi (1999) はさらに一步踏み込み、マル系諸語とビルマ語との比較を通じて、ビルマ系祖語 (Proto-Burmish) の再構形に前声門化頭子音 (preglottalized initial) を立てている。その根拠は藪 (1982) におけるアツイ語や中国のビルマ系諸語における共時的記述^{注25}によるものと、3.2 以下に述べるような声調対応や有気音との対応を挙げている。筆者の意見にかなり近いが、考え方を異にする部分も少なくない^{注26}。このほかにも蓋 (1994) が母音の緊喉：非緊喉の問題を扱っている^{注27}。

筆者はこれまでの先行研究同様、接頭辞 *s- や末子音脱落の代償によって緊喉母音が生じた考えを一方で採るが、そのみならず、前接子音として *ʔ- を立て、これも緊喉母音の来源の一つであると見なす。この *ʔ- がチノ語においては無声鼻音/側面音の起源となっているものであると考える。以下の節における対応関係も、同様の議論である。

また資料上の制約はかなり厳しいが、サンコン語の側面音の比較も興味深い。この小節で挙げた例に関連するため、ここで少し論じておく。上の例で見ると、

注24 詳しくは注 18 を参照。

注25 具体的には戴ほか (1991) に提出されたボラ語やマル語などの記述のことである。

注26 より具体的には 3.3 を参照されたい。

注27 蓋 (1994) ではまず、緊喉母音がチンポー語・ツァイワー語・ロロ語などの 10 前後の言語に見られると述べている。その中にチノ語も含まれている。蓋 (1986) ではチノ語の緊喉母音は声調の一部の特性であるとしている。しかし蓋 (1986) は、曼卡土語ではその対立も消失している、と記述している。筆者が調査した限りでは、いくぶん緊喉性の感じられる母音が語例の中に見受けられたが、まったくの自由変異であると考えている。

蓋 (1994) では緊喉母音の特性をさまざまな言語の比較を通じて検証しているが、由来については複雑な対応関係を有しているために決定的なことは言いにくいと述べている。

(8c~f) である。(8c) は「指」を表す語であるが、「手」を表す要素を含んでいる。「手」の意味を表す祖形は PLB. *lak であると考えられ、その発展としてチノ語で la³³-, サンコン語で la³¹-となっていることが分かる。チノ語が 33 調になっている、一見他の言語の緊喉母音と対応していないようにみえるが、おそらくは変調の結果、低調で反映されたものと思われる^{注28}。このサンコン語の例は声母が側面音であるが、同様に他言語が側面音声母と緊喉母音をもつ例でサンコン語が h-となっていることもある(8d, f)。さらに(8e)を見ると、サンコン語の対応部分が -la³³ となっており、緊喉母音化していない。

しかし、これらはチノ語とサンコン語の両者を軸にすると対応が比較的一貫していることに気づく。以下にまとめてみよう。

(9) [チノ語とサンコン語における側面音の対応]

- J. Sk.
- i. (8c) l- l- Sk. 緊喉母音
- ii. (8d, f) ɭ- h-
- iii. (8e) ɭ- l- WB. 第3声調

(9i) はサンコン語で主母音が緊喉母音であってもチノ語が無声側面音で出ない例である。(9ii) は他言語で緊喉母音である場合の基本対応例であるが、チノ語で無声側面音が出る場合はサンコン語では h- の声母をもつ。この(9ii) の対応では(8d) の例でロ口系のみが対応しているため、明確なことは言えないが、(8f) でビルマ系諸語の対応を見ると、アチャン語で ɭ-, マル系諸語の韻母で緊喉母音 + 末子音を持つことから、チノ語の ɭ-, サンコン語の h- は、ことによると PLB. *ʔ-l の変遷によるものと考えられるべきかもしれない。そしてマル系諸語の緊喉母音はその影響とし、アチャン語およびマル系諸語の末子音は、祖形における末子音の痕跡 (PLB. *-p) であると考えられることができるかもしれない。ただし、(9iii) を見ると、チノ語で無声側面音を持ちながらも、サンコン語では l- で、かつ主母音も緊喉母音ではない。しかし、これはビルマ語を見ると、第3声調(緊喉調)であり、別に扱うべき対応

^{注28} [チノ語の変調規則]

チノ語の変調は非常に複雑な状況であるが、明らかになっているものとして 42+55→33+55 という規則がある(詳しくは林 2002a を参照されたい)。以下にその例を挙げる。

- a. ja⁴² + vu⁵⁵ → ja³³vu⁵⁵
 鶏 卵 「鶏の卵」
- b. mja⁴² + mu⁵⁵ → mja³³mu⁵⁵
 目 毛 「眉毛」

法則であると言える。この対応に関しては更なる検討が必要である。

この小節で見た変化を図式化すると以下になる。

<LB 諸語の緊喉母音の変遷過程 >

		(1)	(2)	(3)
		*PLB.	変遷過程	ロロ=ビルマ諸語
(10)	a	*s/?-N/L-V	*N/L̥-V	N/L-V
	b	*CVC#	*CVʔ#	CV
				CVʔ
		*CVC#	CVC	

<チノ語における無声鼻音/側面音の変遷過程 >

		(1)	(2)	(3)
		*PLB.	変遷過程	チノ語
(11)	a	*s/?-N/L-V	*N/L̥-V	N/L̥-V
	b	*N/L-V C#	*ʔN/?L-Vʔ#	

3.2 チノ語の高声調：LBの緊喉母音

LB 諸語で緊喉母音を持つ語の同源語について、チノ語において鼻音や側面音が無声でなく、高声調をもっているという、もう一つの対応がある。この例を見てみよう。

- (12) a. na⁵⁵(「早い」; *H. na*³¹; *L. (南) ne*²¹; *Lis. ne*³¹; *Ac. no*^{ʔ55}; *M. no*^{ʔ55}; *Las. no*^{ʔ55}; *At. no*^{ʔ21}; *C. no*^{ʔ55}; †*WB. so*²⁻; *Bs. —*; *Sk. —*; ZM1018)
- b. mø⁵⁵(「飢える」; *H. me*³¹; *L. (南) me*²¹; *Lis. he*³¹*mur*³¹; †*Ac. sut*⁵⁵; *M. mø*^{ʔ31}; *Las. mu:t*⁵⁵; *At. mut*²¹; *C. mut*⁵⁵; †*WB. chaa*¹⁻; *Bs. —*; *Sk. mbe*³¹; ZM1298)
- c. a⁵⁵na⁴²(「黒い」; *H. na*³³; *L. (武) na*²; *Lis. ne*³³; †*Ac. lək*⁵⁵; *M. no*^{ʔ31}; *Las. no*^{ʔ31}; *At. no*^{ʔ21}; *C. no*^{ʔ55}; *WB. nak-*; †*Bs. ʔaŋpláŋ*(503); *Sk. nda*³³; ZM1005)
- d. lo⁵⁵(「足りる」; *H. lu*³¹; *L. (南) lo*²¹; *Lis. lo*³¹; †*Ac. kom*³⁵; *M. lau*³¹; *Las. lu:k*⁵⁵; †*At. ŋap*²¹; †*C. kum*³⁵; *WB. lək-*; †*Bs. ʔaŋkó*(560); *Sk. —*; ZM1349)
- e. lə⁵⁵tsho⁵⁵(「ズボン」; *H. la*³¹*tshø*³¹; *L. la*⁵⁵; †*Lis. q*³¹*gua*³¹; *Ac. lo*³¹; *M. lo*³⁵; *Las. lo*⁵⁵; *At. lo*²¹; *C. lo*³¹; †*WB. bhong*²*bhi*¹; †*Bs. khüttsəŋ*(228); †*Sk. tsa*³¹*ngə*³¹; ZM471)

これまで主に中国で行われてきた緊喉母音の比較研究では、声調の対応が特に中心に扱われてきた傾向がある。例えば陳 (1988) や戴 (1990) などがその代表格と考える。前者は口語の方言比較を通じて、緊喉母音にまつわる声調を甲類 (緊甲調 [声母が無声])・乙類 (緊乙調 [声母が有声]) の 2 種類に分け、それぞれが他の口語系諸語の各々の声調に対応することを述べている。後者の戴 (1990) は、声母との関係にも言及しているが、基本的には母音同士の対応をとり、緊喉母音が他の言語の非緊喉母音と対応している場合は、緊喉母音同士の対応における声調対応と異なっていることなどを述べている。

上にあげた (12a~e) は口語 = ビルマ系で緊喉母音をもつ語に対して、チノ語形の初頭音である鼻音/側面音が有声で出ている例である。チノ語の声調はいずれも高声調グループ (55, 42 調) に属している。ときにチノ語で 33 調のものが他の言語の緊喉母音あるいは無声鼻音/側面音と対応している場合もある (チノ語 $\eta a^{33}z\text{ɔ}^{55}$: ビルマ文語 hngak 「鳥」)。しかし、これは変調の結果であり、42 調から 33 調に共時的に変化したものだととらえるべきであろう^{注29}。(12a~d) はそれぞれ、PLB として *nak, *mut, *nak, *lok と再構できるが^{注30}、すべて末子音が一旦-[?]に変化した後、音節全体に影響を与えて、チノ語において高声調に反映していった、と考えられる。これらは末子音の存在から鼻音/側面音の声母が直接影響を受ける前に高声調として反映してしまった結果、無声化が起きなかったと見るべき点かもしれない。一方で (12e) のように末子音を再構する証拠をもたない例の場合、声母に*[?]-が存在したかもしれない可能性をもっている。このような場合は一旦声母が無声化し、その声母が有声になる代償として声調が高くなるというプロセスも考えあわせる必要がある。

注29 詳しくは注 28 を参照されたい。

注30 それぞれの再構の手続きを簡単に述べておこう。それぞれの声母は基本的に各言語で (12a)n-, (12b)m-, (12c)n-, (12d)l- であるので、PLB 形もそのまま *n-, *m-, *n-, *l- と再構する。韻母の方はやや難しいが、これは 0.2 でも述べたように、ビルマ文語をはじめとするビルマ系諸語を根拠とする。(12a) はビルマ文語形が非同源であると思われるので根拠にできない。ここではビルマ系諸語において、マル語-^ɔ?: ラシ語-^ɔ?: アツイ語-^o?: チンタウ語-^ɔ? の対応があることを見ておく。同時に (12c) を見ると、マル語-^ɔ?: ラシ語-^ɔ?: アツイ語-^o?: チンタウ語-^ɔ?: ビルマ文語-ak の対応があることが確認できる。この際、(12c) の韻母の再構をビルマ文語に基づいて *-ak と再構する。これと平行して、ビルマ文語を除いたビルマ系諸語の対応が (12c) と同じ (12a) も *-ak であると再構することとなる。(12b) もビルマ文語形が非同源であるため参考にできないが、ビルマ系言語の韻母を参考に *-ut を再構する。(12d) はビルマ文語を参考に *-ok を推定する。詳しくは林 (2002a) を参照されたい。

- (13) a. xɛ⁵⁵(「8」; H. ɕɛ³¹; L. hi⁵⁵; Lis. hɛ̃³¹; Ac. ɕet⁵⁵; M. ʃɛ⁷⁵⁵; Las. ʃɛt⁵⁵; At. ʃit⁵⁵; C. ɕet⁵⁵注31; WB. hrac; †Bs. pèt(485); Sk. ɕɛ³¹; ZM804)
 b. a³³ʃi⁵⁵(「新しい」; H. sɿ³¹; L. a³³ʃi⁵⁵; Lis. ʃi³¹; Ac. ʃək⁵⁵; M. sak⁵⁵; Las. sɛ:k⁵⁵; At. a²¹sik⁵⁵; C. ʃuk⁵⁵; WB. sac-; Bs. ʔaŋjũ(536); Sk. aŋ³³sɿ³¹; ZM1050)

(13a, b) は声母が摩擦音の例である。これらは声母の有声/無声とは関係ないが、他の言語の緊喉母音とチノ語の高声調が対応している。

すなわち一般化を試みると、PLB. *s/ʔ-N/L-V>J. N/L-V^{H-tone}, PLB. *ʔ-CV# あるいは *CVC>J. CV^{H-tone}, PLB. *N/L-VC#>J. N/L-V^{H-tone} である注32。

3.3 チノ語の有気音：LBの緊喉母音

最後に PLB. *ʔの影響により、チノ語で声母が有気化した例を見たい。

- (14) a. a³³phre⁵⁵(「扁平な」; H. bja³³; †L. ba³⁴tɕ³³; Lis. piɛ³³; Ac. phzap⁵⁵; M. —; Las. pji:n⁵⁵; At. pjen⁵⁵; C. phen³¹; WB. pra²⁻; Bs. ʔaŋphlen/ʔaŋten(530); Sk. —; ZM991)
 b. khø⁴⁴(「怖がる」; H. gu³³; L. (巍) go³³; Lis. dzø³³; Ac. zø⁷⁵⁵; M. kjauk³¹; Las. kju:k³¹; At. kju⁷²¹; C. ju⁵⁵; WB. krək-; Bs. khɛ(689); Sk. qhe³³; ZM1366)
 c. tʃho⁵⁵(「寒い」; H. gə³³; L. (南) dzɿ³³; Lis. dzɛ³³; Ac. kzuat⁵⁵; M. kjo⁷³¹; †Las. ŋa:m⁵⁵; At. kjo⁷²¹; C. kzot⁵⁵; WB. khjam²⁻; Bs. ʔaŋchò(514); Sk. tɕho³¹; ZM1063)
 d. tʃha⁵⁵(「煮る」; H. tɕa³¹; L. (南) tɕɛ⁵⁵; Lis. tɕa⁵⁵; Ac. zau⁵⁵; M. tʃɔ⁷⁵⁵; Las. tʃa:u⁵³; At. tʃo⁷⁵⁵; †C. tɔŋ³⁵; WB. khjak-; Bs. —; †Sk. tɕŋ³³; ZM1804)
 e. khja⁴²(「櫛でとく」; H. ka³³; L. ku⁵⁵; †Lis. pu⁵⁵; Ac. phza³¹; M. kjo⁷⁵⁵; Las. kjo: ⁷⁵⁵; At. kjo⁷⁵⁵; C. phɛ³¹; WB. phri³⁻; Bs. tũkhja khja(679); Sk. khə³³; ZM1634)

注31 黄主編(1992)では ɕet⁵⁵ となっているが、チンタウ語の音韻体系にtが認められないため、ここでは ɕet⁵⁵ の誤りであろうと思われる。

注32 C は鼻子音と側面音を除く子音を表す。3.2 では声母が鼻音/側面音もしくは摩擦音の例しか提示してこなかったが、同様のことは他の子音でも言える可能性が高い。しかし資料の制約上、ここでCとしたところは摩擦音であると考えた方がよいかもしれない。

- f. a⁵⁵kho⁴⁴(「曲がっている」; H. yu³¹; L. (南) gu²¹; Lis. go³¹; Ac. kok⁵⁵; M. ŋauk³¹; Las. ko:i⁵⁵; At. koi⁵⁵; C. ko⁷³⁵; WB. kək-; Bs. ʔaŋkəj(539); Sk. qo³¹(棒が曲がっている); ZM1004)
- g. to⁵⁵tho⁴⁴(「立ち上がる」; H. thu⁵⁵la⁵⁵; L. tu²¹la³³; Lis. tu³³la³³; Ac. tho³⁵; M. tɔ⁵⁵; Las. tɔ:⁵³ɔ:³¹; At. tɔ⁷⁵⁵; C. tho⁷⁵⁵ɔ³⁵; WB. tha³⁻; Bs. tha(687); Sk. —; ZM1567)

これらの例も個々に見ていこう。(14a, b, c, f) は口舌系諸語の例を見ると、ほぼすべて声母が有声である^{注33}。PLB を立てる際、口舌系諸語の例が有声の声母を持てば、基本的に祖形でも有声音を立てる。これは閉鎖音の基本的対応を考察する上で、PLB の有声音はチノ語の無声無気音に、PLB の無声音はチノ語の無声有気音に変化したと考えられるからである。すると例えば、(14a) では PLB. *b->*p- の変化が一旦生じた、と考える必要がある。しかし、それではなぜチノ語では有気音になったのかの説明が付かない。

そこで、この場合もビルマ系諸語との対応から、緊喉母音の発生も合わせて考えて、初頭に PLB. *ʔ- が存在し、チノ語の破裂音において有気音を誘発したとみなす。つまりチノ語は、(14a) の例では PLB. *ʔ-bl->Proto-Jino. *ʔ-pr->J. phr- の変遷を経た、と考える^{注34}。

(14d) の例の処理は一見難しい。口舌系・ビルマ系ともに、声母は無声無気音で韻母に緊喉母音を持っている言語が多い。しかし、祖形再構の根拠となりやすいビルマ文語を見ると、声母はすでに有気音になっている。よって以下のように考える。この例はマル語・アツィ語を見ると、緊喉母音と末子音-ʔ^{注35}を両方とも持っている。これらから、両言語の緊喉母音は(14a, b, c, f) の例と同じく、祖形の段階で PLB. *ʔ- を持っていた影響を被ったと考え、末子音-ʔ は祖形における末子音*-k の反映であると考えられる。すると、想定される(14d) の祖形は PLB. *ʔ-gzak となる^{注36}。チノ語では前接子音*ʔ- が有気音化を促したと考えられる。このことは

^{注33} (14a) のリス語の例は無声である。

^{注34} (14a~c) の現代チノ語への音韻変化を一応示しておきたい。

(14a) PLB. *ʔblen>Proto-Jino. *ʔpren>*phren>Modern Jino. (a³³)phre⁵⁵

(14b) PLB. *ʔgrok>Proto-Jino. *ʔkjok>*khjɔ>Modern Jino. khɔ⁴⁴

(14c) PLB. *ʔgrot>Proto-Jino. *ʔkjot>*khjo>Modern Jino. tʃho⁵⁵

(14b) の変遷で介音-j が脱落しているが(*khjɔ>khɔ)、チノ語において介音は前舌母音の前で脱落するするためである。詳しくは林(2002b)を参照されたい。

^{注35} ʔ は参考にした記述資料の用いるままにしてあるが、音韻構造上1つの分節音をなすものと考えられる。

^{注36} ここで想定される現代チノ語への音韻変化は以下のようになる。

(14e)にも同様にあてはまる。

(14g)は口舌系およびビルマ系の多くで開音節であり、ビルマ文語も開音節を見せていることから、PLBでも開音節を再構することとなる。しかし問題もある。マル系諸語で緊喉母音をもっており、アツィ語・チンタウ語で末子音-ʔをもって、という点である。これまでの議論では末子音-ʔは祖形の閉鎖音の末子音の反映であると考えてきたが、ここではビルマ文語などとの整合性から前接子音*ʔ-が音節全体に影響を与え、声母の有気音化を促すことに加えて、韻母にも影響を与えられられる。アツィ語の例では*ʔ-の影響で緊喉母音になる前に音節末尾で声門閉鎖が生じ、チンタウ語では声母の有気音化および韻母の声門閉鎖が促された、と考えられる。

すなわち変化を式に表すと、*ʔ-C> チノ語 C[+aspirate] である一方で、*ʔ-CV[-creaky]> 他のLB諸語 CV である^{注37}。

ここで振り返ると、鼻音/側面音の無声化とこの有気音化を音韻的に「出気音化」とまとめると理解しやすい。すなわちこれらの*ʔ-がチノ語において声母の出気音化を促したと考えるわけである。[ʔ]が出気音の動機付けになる理由は子音のVOT (Voice Onset Time, 声立て時間)をplainのものよりずらすことにある。Bradley (1979)もこのことを対応表を用いて言及しているが、頭子音の対応だけを取りだしているため、他の口舌=ビルマ系の言語で*ʔ-CがC-という声母に変化するという結論を得る一方で、*ʔ-の影響で母音が緊喉化していることを見過ごしてしまっている。またNishi (1999)も頭子音からの影響で緊喉母音が発生したと考えており、大変興味深い点を指摘している。しかし筆者と若干意見を異にしている部分も存在する。以下にそれを挙げたい。

Nishi (1999: 97-98) は以下の2例に言及している^{注38}。

- (15) a. ta⁴²(「登る」); H. da³³; L. (武) da²; Lis. dɛ³³; Ac. tɔ⁷⁵⁵; M. tɔ⁷³¹; Las. tɔ:⁷⁵⁵; At. tɔ⁷²¹; C. tɔ⁷⁵⁵; WB. tak-; Pola. taʔ³¹; Bs. ta/tha(652);

PLB. *ʔgzak>Proto-Jino. *ʔkjak>*khja>Modern Jino. tʃha⁵⁵

しかしこの祖形はまだ問題があるかもしれない。林 (2002b) で指摘したように、PLBの介音の再構にはアチャン語の-z-を参考にするため、ここではPLB. *-z-を再構したが、同時にチノ語で破擦音 tʃ(ɬ)を持つ場合、祖形の候補として*gjがあることも注意せねばならない。

^{注37} 戴 (1990) はハニ語とナシ語を対照し、ハニ語で緊喉母音の場合、ナシ語では声母が有気音になっている例を取り上げている。しかし、その由来や具体的な変遷過程については考察していない。

^{注38} ここではNishi (1999) と掲げている言語が違うので、注意されたい。

ZM1609)

- b. ta⁴²(「上がる」); H. da³³la⁵⁵; L. (武) du³³le³³; Lis. dɛ³³; Ac. tho⁷⁵⁵; M. thuk⁵⁵; Las. tɔ:⁷⁵⁵; At. to⁷²¹; C. mɔ:ɔj⁵⁵; WB. tak-; Pola. tho⁷⁵⁵; Bs. ta/tha(652); ZM1623)

Nishi (1999) は上の例に対して以下のような記述を行っている。

「マル系諸語において普通形と使役形が合流することで不規則性が引き起こされたように見える例も存在する。こうして、2番目のラシ語形 ([ZM]1623 [ここでは (15b)]) が緊喉母音を持っている。マル語 (*-t>-k) とボラ語がともにビルマ系祖語 *tut から、アツィ語がビルマ系祖語 *dak から派生しているので、もしアチャン語の韻母がビルマ系祖語 *-ut の不規則的な反映でなければ、アチャン語の出所は明らかではないが、ラシ語形は tɔ:⁷⁵⁵ の誤植であるようだ。(中略)

[ここで] ラシ語の tɔ:⁷⁵⁵ がビルマ系祖語 ?tak 「(何かに) 登る」から派生したか、もしくはそれ [tɔ:⁷⁵⁵ 自体] が誤植であるか、ということ推定できるかもしれない。前者が正しければ、ラシ語の tɔ:⁷⁵⁵ ([ZM]1609 [ここでは (15a)]) [の声調] が 31 調の誤植であるか、ラシ語も本来の普通形/使役形の区別が失われて、ビルマ系祖語 *?tak から派生した形式のみを残しているか、のいずれかであることを結論づけられるかもしれない。一方で、後者が正しければ、([ZM]1609 [ここでは (15a) のデータ]) のラシ語の声調も単純に誤植である。前者のラシ語形がビルマ系諸語だけでなく口口 = ビルマ諸語全体で孤立した例であるので、ここでは後者の解決法に従う。」^{注39} (Nishi 1999: 97-98, 本文中の [] 内は筆者の訳注である。)

^{注39} 原文は以下である。(太字は原文通り)

“There are also cases in which irregularity appears to be introduced by the merger of simplex and causative forms in the Maruic languages. Thus, the Leqi form of the second set (1623) has a laryngealized vowel. Since the Langsu (*-t>-k) and Bola forms both derive from **PBsh *tut** but the Zaiwa form from **PBsh *dak**, while the provenance of the Achang form is not certain unless its rhyme is an irregular reflex of **PBsh *-ut**, the Leqi form appears to be a misprint for tɔ:⁷⁵⁵. . .

We may either assume that **LEQ tɔ:⁷⁵⁵** derived from **PBsh *?tak** ‘climb sth.’, or that it is a misprint. If the former is the case, we may conclude either that the tone of **LEQ tɔ:⁷⁵⁵** (1609) is a misprint for 31, or that Leqi also lost the original simplex/causative distinction and retains only the form **PBsh *?tak**. On the other hand, if the latter is the case, the Leqi tone in (1609) too

つまり、Nishi (1999) のここでの結論は以下になろう。

(16) a. (15b) のセットはマル語・ポラ語とアツィ語において同源ではない。

b. (15a, b) のラシ語形はともに誤植である。

通常 LB 諸語では causative の交替を形態的に表す場合は、緊喉：非緊喉で表したり、声母の有声：無声で表したりするが (西田 2000 など)、マル系諸語ではその causative の対立が消失してしまうと Nishi (1999) は述べている。その例として上のものを挙げており、最終的な結論として、ラシ語で V : \bar{V} に見えるのは普通形：使役形を表す * \emptyset - : * $\bar{?}$ - の反映ではなく、(15b) のラシ語の音が印刷間違いであり、正しくは $t\bar{o}ʔ^{55}$ であろうと述べている。

しかし、その考察過程は理解しにくいところもある。そもそも意味的にこれらが使役：非使役の関係に立つかが疑わしい。またマル系諸語の韻母の比較で、「マル語 (*-t>-k) とポラ語がともにビルマ系祖語 **tut* から、アツィ語がビルマ系祖語 **dak* から派生しているので、もしアチャン語の韻母がビルマ系祖語 *-*ut* の不規則的な反映でなければ、アチャン語の出所は明らかではないが、ラシ語形は $t\bar{o}ʔ^{55}$ の誤植であるようだ。」と述べている。しかし Nishi (1999) の言うとおりに、たとえラシ語形が誤植で、(15b) の正しい語形が $t\bar{o}ʔ^{55}$ であったとしても、マル・ラシ・アツィの 3 言語でこれほどビルマ祖語と異なる祖形を立てることは通常考えにくい^{注40}。チノ語の韻母-a は基本的に PLB. *-*ak* から派生したと考えられるため^{注41}、PLB の段階においても (15b) の祖形は **dak* を立ててもよいはずである。確かにビルマ文語等の対応で考えれば PB. *-*ut* を立てられることも考えられるが (WB. *thut-* ; M. *thuk*⁵⁵ ; Las. *tho*^{ʔ55} 「取り出す」)、一方で PB. *-*wak* も十分に祖形として候補に挙げられそうだ (WB. *thwak-* ; M. *thuk*⁵⁵ ; Las. *tho*^{ʔ55} 「出

is simply a misprint. Here I follow the latter solution because the former Leqi form is an isolated example not only in Burmish but also in Lolo-Burmese as a whole.”

^{注40} Nishi (1999) はビルマ系諸語の音韻対応を大変よく整理している。しかしその整理した点を重視するがために、例外と思えるものを軽視しすぎている観もある。例えば、Nishi (1999) では結局のところ正しい語形がどのようなものであるかを具体的に示していないが、(15a) の声調が 31 調であるかもしれないと仮説を示したのは、ビルマ文語の促声韻がマル系諸語の低声調に対応する場合、マル語 31: ラシ語 31: アツィ語 21: ポラ語 31 の基本的対応があることが念頭にあるためであろうと思われる。しかし同じ条件でラシ語が 55 調である他の例も若干だが存在する。声調対応の例外は少なからず見られるため、慎重に取り扱うべきである。

^{注41} 注 30 でもこのことに言及した。

る」)。韻母の変遷だけを考慮するとアチャン語の韻母の対応がアチャン語-o[?]：マ
ル語-uk：ラシ語-o[?]である場合もあり、ビルマ文語形が一致しない場合、どのよう
な基準で韻母の再構を行うかは判然としないはずである。韻母のみを取り出すと、
むしろ PB. *-wak あるいは*-ak でもよいはずである。韻母における対応が複雑で
あることは他の例でも分かるため、このあたりの考察は慎重に進めなければならない
、と思われる。

つまりまとめると、筆者の主張において Nishi (1999) と意見を異にする点は以
下のとおりでである。

- (17) a. (15b) においては各言語のデータが同源である可能性が高い。
b. (15a, b) のラシ語形を安易に誤植とは言えない。ラシ語のデータは正しい
可能性はある。
c. (17b) が正しければ、(15b) の祖形は PLB. *dak である可能性がある。

3.4 LB 諸語における緊喉母音、およびチノ語における無声鼻音等の変遷過程

前節までの議論から、LB 諸語における緊喉母音の変遷過程を以下のように表す
ことができる。

<LB 諸語の緊喉母音の変遷過程 >

		(1)	(2)	(3)
		*PLB.	変遷過程	ロロ=ビルマ諸語
(18)	a	*s/?-N/L-V	*N̥/L̥-V	N/L-V
	b	*?-CV#	*?CV?#	CV
	c	*N/L-VC#	*N/L-V?#	N/L-V
	d	*CVC#	*CV?#	CV
			CV?	
	*CVC#		CVC	

つぎにチノ語における無声鼻音等の変遷過程を表にまとめてみたい。

< チノ語における無声鼻音等の変遷過程 >

		(1)	(2)	(3)
		*PLB.	変遷過程	チノ語
(19)	a	* _s /ʔ-N/L-V	* _{N̥} / _{L̥} -V	_{N̥} / _{L̥} -V
				N/L-V ^{H-tone}
	b	*ʔ-CV# あるいは *CVC	*ʔCVʔ#	C[+aspirate]V
				CV ^{H-tone}
	c	*N/L-VC#	*ʔN/ʔL-Vʔ#	_{N̥} / _{L̥} -V
				N/L-V ^{H-tone}

(19c) に関しては、より詳細に変遷過程を書き表すと以下のようになる。

(20) *NVC# > *NVʔ# > *ʔNVʔ# > _{N̥}NV#
 (*LVC# > *LVʔ# > *ʔLVʔ# > _{L̥}LV#)

ʔはどの位置にあっても、音節全体に緊張をもたらすものであると考えられる。つまり、たとえこのʔが音韻論的には末尾にあると考えられても、音声の変遷過程においては音節初頭にも若干の緊張を与えるものと解釈するべきである^{注42}。このことがチノ語の無声鼻音/側面音の来源の一つであると考えられる。

4 おわりに

本論文ではチノ語の無声鼻音/側面音とLB諸語の緊喉母音の対応を見、PLBの*ʔがその両者の源の1つとなっていることを見た。さらに一方でPLBの*ʔがチノ語の高声調や有気音にも対応している点を指摘した。

従来、緊喉母音は「(祖形の)末子音脱落の代償」であると考えられることが多かったが、その論は不十分であった。また一部の先行研究においては声母の影響において緊喉母音化を促すことも考えられてきたものの、比較の対象に上がっている各言語の事情はあまり詳細には検討されてこなかった。

本論文では声母である*ʔが母音に影響を与え、緊喉化を誘発する過程を具体的に示し、先行研究では言及されなかった無声鼻音/側面音との関連をより明確に述べた。とくにチノ語の無声鼻音/側面音の派生について詳細に記述した点は新しい。

^{注42} 藪 (1982) もアツィ語の音声記述で、緊喉母音を伴った鼻音頭子音は「前出声門化音が観察される」と述べている。このことをふまえて、Nishi (1999) は前出声門化音がビルマ語音韻史においても重要な働きを持っていると考えている。

また同時に、チノ語と同じ性格をもつ言語として、アチャン語やビス語をあげ、とくにビス語と安定した対応が見られることも合わせて指摘した。このことから同源語の韻母に末子音が存在するかどうかという点を除けば、音韻論的にチノ語はアチャン語・ビス語と近似していることがわかった。

この分野の研究はこれまでも比較的多くなされてきたものの、まだ多くの問題点が残されており、本論文でも完全に解決されたとまでは言えない。例えば、同様の祖形と推定される例でも、ある例では緊喉母音をもち、またある例では緊喉母音を持たない場合(チノ語などの緊喉母音を持たず、無声鼻音/側面音をもつ言語の場合は、ある同様の祖形が推定される例で無声で出る場合と出ない場合が存在する)の、分裂の条件を導き出せていない。これらは現段階では資料の限界があり、これ以上の考察は難しいが、進展の待たれる問題であり、今後の課題としたい。

略号・記号表

< 言語・方言名略号 >

Ac.	アチャン語 (阿昌語)	PB.	ビルマ系祖語
At.	アツイ語 (ツァイワー語、載瓦語)	PLB.	ロロ=ビルマ祖語
Bs.	ビス語 (畢蘇語、Bisu)	SB.	ビルマ口語 (ヤンゴン=マンダレー方言)
C.	チンタウ語 (仙島語)	Sk.	サンコン語 (桑孔語)
H.	ハニ語 (哈尼語)	Th.	タイ語 (Thai)
J.	チノ語 (基諾語)	WB.	ビルマ文語
L.	ロロ語 (彝語)	ZM	黄 (1992) の資料番号
Las.	ラシ語 (勐腊語)	(墨)	ハニ語墨江方言
LB.	ロロ = ビルマ系諸語	(巍)	ロロ語巍山方言
Lis.	リス語 (傣僳語)	(南)	ロロ語南華方言
M.	マル語 (浪速語)	(武)	ロロ語武定方言

< 記号 >

C	鼻音・側面音以外の子音	H-tone	高声調	L	側面音	N	鼻音
V	緊喉母音	VOT	声立て時間	†	非同源語		

参考文献

< 日本語文献 >

- 岩佐一枝 1996. 「彝語にみられる周辺諸言語の影響—音韻面を通して—」
神戸市外国語大学大学院修士論文.
- 黒澤直道 2001. 「ナシ(納西)語「緊喉母音論争」の意義—中甸県三壩郷
白方言に見られる音声現象からの考察—」『アジア・アフリカ言語文化
研究』第61号: 241-250.
- 坂本比奈子 1996. 『言語研修 タイ語テキスト タイ語語彙集』東京: 東京
外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 西田龍雄 2000. 『東アジア諸言語の研究I 巨大言語群—シナ・チベット語
族の展望』京都: 京都大学学術出版会.
- 林範彦 2002a. 「チノ語の音韻に関する研究—周辺諸語を見据えて—」京都
大学修士論文.
- 2002b. 「チノ語の介音について—ロロ=ビルマ諸語との比
較研究から—」『日本言語学会第124回大会 予稿集』pp. 143-148.
- 藪司郎 1982. 『アツィ語基礎語彙集』東京: 東京外国語大学アジア・アフ
リカ言語文化研究所.

< 漢語文献 >

- 白碧波 (Bái Bìbō) 1990. 「哈尼語咪疊話和大寨話的語音比較」『紅河民族
研究』1990年第1期: 117-127.
- 陳康 (Chén Kāng) 1988. 「彝語的緊調類」『民族語文』1988年第1期:
18-26.
- 1993. 「藏緬語塞音韻尾演變軌跡」『民族語文』1993年第
1期: 22-26.
- 陳康・巫達 (Wū Dá) 1998. 『彝語語法』北京: 中央民族大学出版社.
- 戴慶厦 (Dài Qìngxià) 1979. 「我國藏緬語族松緊元音來源初探」『民族語
文』1979年第1期: 31-39.
- 1985. 「阿昌語的清鼻音」『民族語文』1985年第2期: 11-15.
- 1990. 「藏緬語族松緊元音研究」戴慶厦『藏緬語族語言研
究』pp. 1-31. 昆明: 雲南民族出版社.

- 戴慶廈·段貺樂 (Duàn Kuànglè) 1995. 『哈尼語概論』昆明: 雲南民族出版社.
- 戴慶廈·黃布凡 (Huáng Bùfán)·傅愛蘭 (Fù Àilán)·仁增旺姆 (Rénzēng Wàngmǔ)·劉菊黃 (Liú Júhuáng) 1991. 『藏緬語十五種』北京: 北京燕山出版社.
- 蓋興之 (Gài Xīngzhī) 1981. 「基諾語概況」『民族語文』1981年第1期: 65-79.
- 1986. 『基諾語簡誌』北京: 民族出版社.
- 1994. 「藏緬語的松緊元音」『民族語文』1994年第5期: 49-53.
- 2002. 「堂郎話概況」『民族語文』2002年第3期: 67-81.
- 胡坦 (Hú Tǎn)·戴慶廈 1964. 「哈尼語元音的松緊」『中國語文』1964年第1期: 76-87.
- 黃布凡主編 1992. 『藏緬語族語言詞匯』北京: 中央民族學院出版社.
- 黃布凡 1994. 「藏緬語聲母對韻母演變的影響」馬學良 (Mǎ Xuéliáng)·胡坦·戴慶廈·黃布凡·傅愛蘭 『藏緬語新論』pp.50-70, 北京: 中央民族學院出版社.
- 李永燧 (Lǐ Yǒngsuì) 1992. 「桑孔語初探」『語言研究』1992年第1期: 137-160.
- 龍傑貴 (Lóng Luòguì)·李應發 (Lǐ Yīngfā) 2001. 「紅河景濮拉頗語言調查」『紅河民族研究』2001年第1期: 99-105.
- 王成友 (Wáng Chéngyǒu) 2001. 「葛頗語言調查」『紅河民族研究』2001年第1期: 93-98.
- 楊煥典 (Yáng Huàndiǎn) 1984. 「論納西語的音位系統」『アジア・アフリカ語の計数研究』第22号: 131-146.

< 歐文文獻 >

- Bradley, David 1979. *Proto-Loloish*, London: Curzon Press.
- 1988. "Bisu Dialects", In: Paul K. Eguchi et al. eds., *Languages and History in East Asia: Festschrift for Tatsuo Nishida on the Occasion of his 60th Birthday*, pp.29-59, Kyoto: Shokado.
- Burling, Robbins 1966. "The addition of final stops in the history of Maru(Tibeto-Burman)", *Language*, 42.3: 581-586.

- Kato, Takashi 2002. "Bisu vocabulary", In: Tasaku Tsunoda ed., *Basic Materials in Minority Languages 2002* (ELPR Publications Series B003): 115-132, Suita: Osaka Gakuin University.
- Nishi, Yoshio 1999. *Four Papers on Burmese—Toward the History of Burmese(the Myanmar language)—*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa(ILCAA).
- Thurgood, Graham 1981. *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa(ILCAA).

On the influence of Proto-Lolo-Burmese *ʔ upon Modern Jino

HAYASHI Norihiko

Abstract

Jino is now spoken by the Jino minority living in Xishuangbanna District, Yunnan Province, China. Jino has two dialects, Youle and Buyuan. The Jino population is about 20,000.

Jino is considered to belong to the Lolo-Burmese branch of the Tibeto-Burman family. Some of scholars think of Jino as a member of the Loloish languages, but this needs to be considered further because Jino has some Burmish characteristics.

The purpose of this paper is to examine the influence of Proto-Lolo-Burmese *ʔ upon Modern Jino. In Lolo-Burmese languages, there are many languages which have creaky vowels but do not have voiceless nasals/latelals in the phonological systems. On the other hand, Jino and some other languages (Achang, Burmese, Bisu) do not have creaky vowels but do have voiceless nasals/latelals. The author thinks that one of the origins of both voiceless nasals/latelals and creaky vowels is Proto-Lolo-Burmese *ʔ. This paper illustrates the phonological changes of the syllables containing *ʔ in Jino and other Lolo-Burmese languages more clearly than before.

The author points out for the first time that Jino is very similar to Achang and Bisu phonologically except for the existence of closed syllables in the TB cognate words in the latter languages.

The phonological changes in Jino are illustrated as follows. (*PLB. represents for Proto-Lolo-Burmese.)

	*PLB.	phonological process	Jino
a	*s/ʔ-N/L-V	*N̥/L̥-V	N̥/L̥-V
			N/L-V ^{H-tone}
b	*ʔ-CV# or *CVC	*ʔCV#	C[+aspirate]V
			CV ^{H-tone}
c	*N/L-VC#	*ʔN/ʔL-V#	N̥/L̥-V
			N/L-V ^{H-tone}